

樹医からのアドバイス (Vol.21)

～モッコクハマキ～

出雲市樹医センター

樹医 渡部 勝

文字通り、葉っぱを巻き込みその中で蛹になるムシ。正確にはハマキガ科幼虫を意味し、専門書ではハマキガ（葉巻蛾）と記載され、世界中に分布しています。日本には500種類以上もいて、中でも茶ハマキやコカクモンハマキガが有名です。

【ハマキムシの生態】

ハマキムシの成虫は、1cmほどの小さなガ(蛾)で年に4回～5回ほどのサイクルで発生するので、成虫・幼虫・サナギが常に見られます。大部分が夜行性で、よく灯火に飛来します。

葉の表面に卵の塊をウロコ状に150粒～250粒ほど産み付け、約2週間でふ化します。幼虫は分散していき、単独で葉を巻いたりつづったりします。最初に柔らかい葉をまいてゆき、固い葉は2枚～3枚を糸で合わせていきます。約30日でサナギになり、冬は幼虫の状態です。巻いた葉の中で越冬します。

【防除方法】

ハマキムシの卵は葉の表面に生み付けられるので、注意してみれば見つけやすいので、葉ごと摘み取り処分します。幼虫になり、葉の中に入ってしまうと薬剤が直接ムシに付着しないので薬剤が効きにくいです。

ハマキムシが大量発生したりしたときは、単作りして葉の中に入ってしまう前に薬剤散布します。薬剤は、スプラサイドやカルホス乳剤などの浸透移行性のあるものが効果的です。



モッコクハマキによって巻かれた葉